

血栓後症候群の予防には弾性ストッキングを2年間着用

下肢近位部の深部静脈血栓症（DVT）と診断された患者において、血栓後症候群の予防に弾性圧迫ストッキングの1年間の着用は2年間の着用と比べて非劣性であるかについて、他施設ランダム化比較試験を実施し検討した。

オランダの8つの病院の外来において、超音波検査で確認された症候性の下肢近位部深部静脈血栓症の患者で、弾性圧迫ストッキングを12か月間着用し、血栓後症候群が認められなかった518例を対象とした。弾性圧迫ストッキングをさらに1年間継続して着用する群（262例）と、着用を中断する群（256例）にランダムに割り付け、深部静脈血栓症の診断から2年後の血栓後症候群の発症率を比較した。非劣性マージンは、95%信頼区間の上限値10%以内とした。解析の結果、血栓後症候群の発症は弾性圧迫ストッキング着用継続群で13.0%、着用中止群で19.9%であった。両群の血栓後症候群の発症率の絶対差は6.9%、95%信頼区間上限値は12.3%となり、弾性圧迫ストッキング1年着用群は2年着用群と比べ、その効果が劣っていた。生活の質は、両群に差はなかった。

したがって、下肢近位部の深部静脈血栓症の患者における、血栓後症候群予防のための弾性圧迫ストッキングの着用は2年間継続することが必要であることが示された。

出典：British Medical Journal. 2016; 353: i2691